全共闘は明大闘争をかく闘う

秩序を拒否する運動

安保、日帝打倒へ上昇する

両川　敏雄

はじめに

全人民が蜂起し既成の国家実態を廃棄する運動が開始され始めている。全世界の急進派学生と反戦派労働者は、秩序を拒否し体制を打倒する闘争を拡大しつつある。労働者国家を支配し人民解放に敵対している民族共産主義は、帝国主義の死滅と共に必ずや滅びさるであろう。われわれは後進国人民の武装解放闘争が必ずや直接先進国内部内乱と近い将来結合することを確信している。

しかしながら、自然史から人類史への飛躍が近いことは、同時に死滅しつつあるブルジョアジーの最後の狂乱状態が近いことも意味している。第一次世界大戦以降、ロシアに成立した労働者権力は、帝国主義の延命の道を唯一ファシズムとして以外有り得ない事を明らかにした。世界における現情勢は明らかにファシズムの前段階に突入している。労働者国家の成立を後進国の世界分業からの疎外による人民の武装闘争の前進は不断に帝国主義権力同志をして、反革命同盟が強化されざるを得ない情況に追いつめて来ている。にもかかわらず、現代帝国主義は統治形態としてのファシズム—侵略国家の完成以外に自己延命の道がない事を確認しているが故に、侵略と反革命による国民統合からの国民諸段階の組織化を不断に惹起しつつ、反革命同盟内部へヘゲモニーの拡大を追求しているのである。ここに現代過渡期世界における現情勢の特徴がある。

ここでは革命論の問題が直接課題ではないので、くわしい事は別稿で展開したい。

全共闘について

かかる現在、市民社会内部暴大に発生しているヘゲモニーの貧微した政治闘争の貯水池であり、政府中枢権力闘争もこれ抜きには語り得ない。これは国家に対する秩序反戦武装自衛である。

三　直接大衆を自己に繰込む運動—組織である。従って反秩序—反政府運動であるとしても大衆が右からの行動として登場すればファシズム運動に解体吸収されるであろう。われわれは少なくとも国家を常に対象化しつつ武装攻撃—プロ独派を支持する運動でなければならない事を確認する。

四　全人類的解放を社会革命の領域で追求せんとする主体者が、自主講座から批判学問なり地域人民の解放大学への添加を実現しつつ、未来の人間諸関係を内包し、未来の文化を内包する共同—批判文化を獲得する。

内容として全共闘を液に発展の方向性としてみてみよう。

一　全共闘運動が市民社会におけるプロレタリアヘゲモニーによる反戦運動であるならば、外在的には資本性社会の有機体の機能のまひを意味し、内部秩序派、国家権力が登場する事に対してどこまで耐えぬき、反撃できるかの問題として煮つまるはずである。このとき全共闘内部の団結の質が問われるのである。全共闘の発展とはむしろ量的に市民社会末端＝全国学園津々浦々に反乱部隊を開花させることであり、権力がこれを粉砕するときはファシズムとプロレタリアートとの決戦—人民戦線派を奏き込んだところのプロ独かファシズムかの激突の時であることを意味するところまで拡大されることである。階級決戦まで武装占拠闘争が市民社会から消えない事を実現することである。質的には労働者階級内部における占拠派と同じであるがその権力への攻撃性においては学生運動の蓄積を見るならば、極めてすぐれている。としても権力奪取を直接的遂行する組織では有り得ない。従って問題はこの質、反体制—体制の枠を突破した運動をいかに拡大するかという事になる。それは市民社会内部の矛盾を告発し変革する諸階層の運動であると同時に秩序を拒否する永続的運動である。

二　全共闘運動が学生層による運動である以上、全国全共闘の結成による量的組織化は、政府権力の攻撃—大学臨時措置法案粉砕をめぐって可能である。この攻撃が政府権力のなしくずしファシズムとして権力再編の一環である以上、全共闘運動は不断に七〇年安保粉砕—日帝打倒の方向性に上昇していく。ここで問題は全共闘運動が向かう政府危機から政治危機を実現するのだなどと考えてはならない。この問題は前衛に指導された攻撃武装の部隊の介在が不可欠である。確認すべきことは全共闘が権力に対しプロレタリア的団結の下に武装し、全学連に結集する反政府武装攻撃—政治闘争部隊を排出し、運動としてもこれを支持していくことである。

すでに観念の世界で、あれやこれやいう時代は過ぎ去った。美しい空想の世界から、抜け出して腐敗し堕落した現実を一歩一歩変革する時が来たのだ。知恵の女神は武装される必要がある。

明大全共闘は明大闘争をかく闘う

学生運動の全体的基調七〇年安保粉砕、全国学園闘争勝利、大学立法粉砕に設定し、スローガンを帝国主義的再編の一眼——①大学立法粉砕②自主規制——近代化路線粉砕③教授会解体として掲げつつ、直接的要求項目①学生部廃止②処分撤回③学館建設管理運営権獲得④寮〇管規程撤廃⑤農学部再編闘争勝利⑥健保の赤字大学側全額負担要求を具体的獲得目標として前進して行く。

現在学校側が大学立法反対の声明をしているが、正しく彼等が文部省に過去の一切の反省なしに批判していることを、われわれは彼等に突きつけていくだろう。学校側の六項目要求についての解答も学生参加など敵瞞的な事を言いつつ、最終決定権は常に彼等の手中にあるのである。ストライキについても研究教育ができないなどと、たわけた事を言いつつ、学生に自主的にストライキを解くようビラをまく事など、露骨な分断工作を開始しはじめている。われわれはこれらの攻撃をはねかえし、声明文の撤回を実現させるであろう。

明大全共闘は以下の事を実現する事によって明大闘争を勝利するであろう。

全共闘内部の武装行動隊の強化から全闘争委員の武装へ、これによって民青—右翼運動部系学生＝反革命秩序派を粉砕すること、同時にまた国家権力の介入に対しては少くとも一時的ではあれ対時できる組織力量を持つこと。占拠派学生の中から全学連に結集し、中央権力闘争を負う部隊を創設すること、これはマッセンストライキと中央権力闘争の相互拡大深化の問題であり、武装自衛から武装攻撃への問題でもある。

全共闘内部における団結—共同性を対象化しようとする社会革命の軸を確認する事である。この様な事を実現すべき第一歩として夏休み生田の地において二〇日—二五日まで全共闘理論合宿を行いますので、全共闘に結集する学友は必ず出席されるよう要請します。全ての学友は大学立法粉砕—明大闘争勝利の旗の下全共闘と共に最後まで闘い抜こうではないか。（学生会中央執行委員会委員長）